



央州寺通信 五月号



菅原祐軌 ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com

「宗祖降誕会」

気づけば五月号の記事を書くのを忘れていました。申し訳ない。

五月二十一日は宗祖親鸞聖人の誕生日であります。もともと、日本人は誕生日という感覚に疎く(?)、個人個人の生まれた日に歳を取るのではなく、元旦にみんなまとめて歳を取りました。そういった事情から親鸞聖人の正確な誕生日はわからないのですが、真宗高田派の普門という僧が聖人の誕生日は四月一日であったと伝承したことから、旧暦の四月一日、太陽暦の五月二十一日が聖人の誕生日となりました。

さて、みなさんは誕生日をどのような気持ちで迎えておられるでしょうか? 私は仏教を学問として学び始めた当初は「毎日が尊い一日であるのだから、誕生日だろうと元旦だろうと大晦日であろうと尊い一日にはかわり無いではないか。何故に特別扱いせねばならないのだろうか。」ということをおもったものですが、今思うとそれは少し違うのではないかなと思います。

確かに、毎日が「尊い一日」であることにはかわりはありませんが、では毎日何をし、何を食べて、何を考えて生きていたかということをお覚えているかということはありません。「尊い一日」だと口にしておきながら、そのように生きられていないのが私ではないか。と恥ずかしくも思います。また、人間、やはり何か特別な想いを抱く一日というのがあると思います。

私が今でも忘れられないのが二〇十二年の誕生日(七月八日)です。娘の葬の予定日が私の誕生日の一日前でしたが生まれてこなかったのも、もしかすると同じ誕生日になるかもしれないという淡い期待を持ちながら一日を過ごしました。南海子と病院に向かったのが夜の十時半頃、結局葬が生まれてきたのは七月九日の朝三時半を回った頃でした。残念ながら同じ誕生日になることは出来ませんでした、「父親」となった日のことを今でもはっきりと覚えています。

その娘の葬も六歳となり、小学校一年生をもうすぐ終えようとしています。生意気な口を聞くようになってきましたが、葬が私を親にしてくれた恩は忘れることはないでしょうし、この父と娘という新たな関係が構築された一日というのは私にとってかけがえのないとても大事な一日であります。

みなさんも、何か特別な想いを抱く一日があるのではないのでしょうか。それはもしかすると愛する家族や友人との別れの日であったかもしれません。しかし、宗祖親鸞聖人のお示し下さったみ教えは「往生即成仏」の妙果を得させていただく阿弥陀如来さまのご本願のみ教えでございました。今生の縁が尽きる時はすなわち、往生極楽浄土であり、

往生極樂はそのまま仏と成らせていただくことであります。つまり、今生の別れがただの別れで終わるのではなく、仏としての誕生日となるわけでもあります。先にお浄土に還られた方々は自分が家族や友人の悲しみの原因となることは願っていなかったはずです。その点でも、命の終わりに仏とならせていただけるこのご本願、お念仏のみ教えに出遇えた事は本当に有り難いことでありました。悲しい一日の中に慶びが見いだせるよう、慶びの中にさらなる慶びが見いだせるようにこれからもお聴聞させていただきたいものであります。

合掌

文責・菅原祐軌

